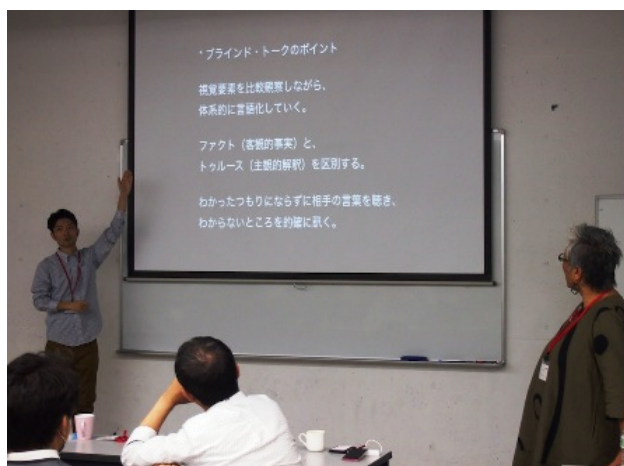


2. ブラインドトーク

オリエンテーションの後は北野諒さんによりブラインドトークというワークショップが行われた。伝え手、受け手のペアになり、伝え手はスクリーンに映し出された作品について、アイマスクをつけた受け手に言葉のみで説明するという内容で、役割を交代し2セット行われた。

アイマスクを外した受け手からは伝え手の言葉によってつくられたイメージと実際の作品の違いを目の当たりにして、一様に驚きの声が出た。どうすればうまくイメージの共有ができたか、という問いのもと行われた振り返りの中では「説明する側が上の立場で、受ける側が下という感覚になってしまう。ただ、共通認識とは伝え手と受け手の2人でつくりあげていくものだと感じた」という意見が出た。

この意見に象徴されるように、私は企業など組織内のコミュニケーションにおいて、伝え手は伝えるのみ、受け手は聞くのみ、という立場の固定が無意識に起こってしまいがちだと考えている。このワークショップは、伝え手は相手がどこまで理解できているのか訊く、受け手はどこまで理解できているか、また何が分からないか伝えるという、コミュニケーションにおけるキャッチボールの重要性を実感できる機会になったのでは、と感じた。



3. ACOP/対話による作品鑑賞

午前の最後のプログラムとして行われたのは伊達隆洋さんがナビゲーターのACOPを用いた作品鑑賞。

鑑賞作品は「カラカラ帝」。作品に関する事前情報はなく、スクリーンに映し出された作品そのもののみによって浮かんだ意見を交換しながら鑑賞を進められた。途中投げかけられた「この人物を上司に持ちたいか？」という問いかけによって場が活性化し、「ワンマンな印象があるから自分なら嫌」「部下のことをみてる気がしない」「自分にはかっこよくみえるのでついていきたい」といった多様な意見が出された。このように真っ向から対立する意見でも自由に出すことができるのもACOPの優れた点である。

また、鑑賞のプロセスでは平野さんがオリエンテーションで挙げられたアートを用いる理由の「どんな意見も受け入れる懐の広さ」「人のこと、自分のことがみえてくる」「建設的な相互作用が生まれやすい」がまさに起こっていたといえるのではないかと感じた。

4. ナビゲーション体験

午後からは本セミナーの柱であるナビゲーション体験。体験の前に福のり子先生からナビゲーションに関するレクチャーが行われた。

ナビゲーターに必要な基本的な作業は「話しやすい雰囲気をつくること」「鑑賞者が語っている部分を手で示すこと（共通理解をもたらす）」の2つ。そしてナビゲーターが鑑賞者に行う基本的な問いかけは「作品のどこからそう思いますか？（根拠を訊く）」「他の意見はありますか？（別の可能性を示す）」「そこからどう思いますか？（さらに思考を促す）」の3つである。

そして今回のセミナーテーマでもある「ロジカルに聴くこと」において極めて重要なのが鑑賞者の意見をFactとTruthで聴き分けることである。Factとは疑いようのない事実であり、Truthとは鑑賞者それぞれの解釈である。例えば「このセミナーは8時間30分ある」はFact、「このセミナーは8時間30分“も”ある」はTruthとなる。ナビゲーターはTruthの根拠となっているFactをつなげるために「どこからそう思いますか？」、Factから受ける印象を導くために「そこからどう思いますか？」という問いかけを駆使し、鑑賞者の意見を積み上げていく鑑賞の交通整理役割を担っている。

レクチャーの後、4～5名のグループに分かれて参加者全員にナビゲーション体験を行っていただいた。「どこからそう思いますか？」という問いかけは比較的できたものの、鑑賞者の思考を促すための「そこからどう思いますか？」という問いを投げかけることが難しかったという意見が出るなど、聴くことの難しさを実感していただいたようだ。



5. 総括

ナビゲーション体験の後は私のファシリテートによる振り返り。それぞれの職場で使えるヒントを持ち帰るため、一日の体験を通じて感じたことをまずは個人で振り返り、その後全員でディスカッション、そして最後にもう一度個人で振り返る時間を設けて総括した。

ディスカッションでは、「社内にもACOPで行われるような自由なコミュニケーションの場が必要」「上司の言っていることが分からないと思うだけでなく、受け手としてできることがあるのではないかと感じた」「他の人の意見を受け容れながら新たな価値を見出すプロセスを体験できることは意義あることである」といったチーム・ビルディングにおける気づきや、「正解に縛られてしまっている若手や管理職のマインドを変えるきっかけになるのでは?」「答えのないものを考え続けるトレーニングとしてアートは適している」「家庭の教育として小さいころからとり入れるべきではと感じた」といった広義の教育における気づきが共有された。

そして講師陣は「どこからそう思う?」「そこからどう思う?」というフレーズは「なんで?」「で?」という普段私たちが会話の中で使っているフレーズに置き換えることができ、重要なのは何を聴こうとしているかという機能であり、フレーズは自由に変えることができること。日常のコミュニケーションではFactとTruthがつながらないまま話が進められる状態が起こりやすい、そこをつなげるためには「ロジカルに聴く」必要があることをコメントした。

私は今回のセミナーに外部協力者としてかかわらせていただいたが、終了後多くの参加者に「素晴らしい機会になった。もっとたくさんの場所に広がって欲しいと感じた。」「職場で実際使ってみようと思います。」というお声をいただいたことが、仲間を得たようで非常に嬉しく思っている。ビジネスパーソン向けセミナーは今後バージョンアップし、また新たな企画として開催することになるだろう。ご参加いただいた皆様、素晴らしい時間をありがとうございました。

(文 関西私鉄グループ人材育成・採用担当/連続セミナーVTS修了生 岡崎大輔)